

名古屋生活クラブからの緊急連絡

福島第一原子力発電所事故に関わる情報 ⑥

放射能基準値の矛盾と危険 子どもが危ない！

食品の放射能基準値について、これまで年間被曝量 1mSv という基準に基づいた場合における設定値の甘さを指摘してきました。放射能はこれ以下なら安全という安全値はない、と言われていました。被曝量に比例してリスクも増えるというのが現在の定説です。

にもかかわらず、緊急時のための基準値は存在します。これがなければ住めなくなる。食べるものがなくなる。これは風評被害でしょうか？今回の事故と被害自体は紛れも無く事実であり、消費者も生産者もそのリスクを負ってしまった事は違いありません。国民に対して基準値以下であれば安全かのように誤認させてしまう。「風評被害」とすることで、値の高さに対する国民の非難を封じてしまう。こういった国や電力会社の対応は正しいのでしょうか。年間被曝量 1mSv という基準と、子どもの放射能に対する感受性への正しい理解をもって、冷静に放射能と付き合っていくことが、原発政策を甘んじて受けてきた日本人のこれからの生活になっていくと思います。

放射能は、子どもの感受性にひとつ大きな問題があります。

以下にヨーロッパ共同体 (EU) の基準を掲載します。

日本にはない子どもの基準がしっかり定められています。

ヨーロッパ共同体(EU)

Bq/kg	乳幼児	乳製品	食品	飲料水など
ストロンチウム 90	75	125	750	125
ヨウ素 131	150	500	2000	500
プルトニウム 239	1	20	80	20
セシウム 134+137	400	1000	1250	1000

これに対し、日本の基準値はウラン、プルトニウムにしかありません。他は大人と同じ基準値が適用されます。

日本(事故時の緊急的指標)

Bq/kg	乳幼児	乳製品	食品	飲料水など
ヨウ素	規定ナシ	300	2000	300
セシウム	規定ナシ	200	500	200
プルトニウム	1	20	10	1

EU は過去のチェルノブイリ原発事故の経験からでしょう、子どもには大人より随分低い基準値を設定しています。国際ガン研究機関(IARC)は、チェルノブイリ原発事故後、汚染地域で子どもの甲状腺がんが大幅に増加したことを受け、そのリスクについて研究しました。それによると、子どものときに甲状腺が受けた被曝量と甲状腺がんには、量に比例する強い関係が見られ、(1 グレイの被曝で) 甲状腺がんは 5.5 倍から 8.4 倍になったとしています。福島原発事故で 20~40k 圏内の推定放射線量は、ベラルーシの子どもが被曝した量と同じ範囲にあります。

また、子供の被曝について、4月19日文科科学省は福島県の子どもに、学校等の校舎・校庭等の利用判断における放射線量の目安として、年間 20mSv という基準を教育委員会や関係機関に通知しました。屋内 16 時間、屋外 8 時間で活動すると仮定して、屋外で 3.8 μ Sv/毎時以内ならよい、という通知です。

子どもの放射能に対する感受性や内部被曝が考慮されていない、危険な数値です。

放射能の感受性の高い子どもからまず、適正な基準値と認識を持つことが必要です。